

## 情報価の概念について

著者名(日)	河野 武
雑誌名	Otsuma review
巻	26
ページ	55-71
発行年	1993-07
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00004319/">http://id.nii.ac.jp/1114/00004319/</a>



# 情報価の概念について\*

河 野 武

## 1. 序

「情報の重要度」の概念の言語学的有用性は、例えば、文要素の配列順序や文アクセントの位置を決定する際に明らかになる。Firbas (1972, 1974) は ‘Communicative Dynamism’ という概念を用いて情報の重要度の概念に実質を与えた。一方、久野 (1978) は情報の重要度の軽重と情報の新旧とを一体化した仮説を提案している。久野の情報の重要度は、「よい新しい（ないしは重要な）情報」対「より古い（ないしは重要度の低い）情報」のような相対的かつ二値的なものとされている。そしてこの重要度の差がさまざまな省略現象の制約として働いているとみなされている。そこで、以下、まず2節では、久野の提案を批判的にながめ、その情報の重要度の概念が省略現象の制約として妥当なものであるか否か、さらに情報の重要度は本当に相対的で二値的なものとしてよいか、を検討する。次に3節では、久野の概念の不備を超克すべく、「情報価」という概念を提案し、情報価とその反映である文アクセントの相関関係を確認する。

## 2. 久野の「情報の重要度」の概念の検討

### 2.1 省略に課される制約としての妥当性

久野は復元可能な要素の省略に課すべき制約として次のようなものを設定している。

- (1) 省略順序の制約：省略は、より古い（より重要度の低い）インフォメーションを表わす要素から、より新しい（より重要な）インフォメーションを表わす要素へと順に行なう。即ち、より新しい（より重要な）インフォメーションを表わす要素を省略して、より古い（より重要度の低い）インフォメーションを表わす要素を残すことはできない。

(久野 (1978: 15-16))

この制約は他の談話法規則と連動して作用するが、以下2.1では、情報の重要度の概念に依拠したこのような制約が省略現象の説明にどの程度妥当であるかを吟味してみたい。

### 2.1.1 主題的副詞と焦点的副詞が関わる場合

久野は、まず、主題的副詞は(2B)にみるように省略可能であるが、焦点的副詞は(3B)に示すように省略不可能である事実注目している。

(2) A: Were you still a small boy in 1960?

B: Yes, I was still a small boy  $\phi$ .

(3) A: Were you born in 1960?

B: \*Yes, I was born  $\phi$ .

そして、このような省略の可否は、(2)および(3)がそれぞれ(4)および(5)に示すようなインフォメーションの新旧(すなわち重要度)の関係を構成するものとし、その情報構造に(1)の省略順序の制約が適用されるものと仮定すれば首尾よく説明されるとしている。

(4) A: Were you still a small boy in 1960?

情報がより新しい 情報がより古い  
重要度がより高い 重要度がより低い

B: Yes, I was still a small boy in 1960.

情報がより新しい 情報がより古い  
重要度がより高い 重要度がより低い

情報がより新しい 情報がより古い  
重要度がより高い 重要度がより低い

(5) A: Were you born in 1960?

情報がより古い 情報がより新しい  
重要度がより低い 重要度がより高い

B: Yes,	<table> <tr> <td data-bbox="339 164 568 204">I was born</td><td data-bbox="568 164 816 204">in 1960</td></tr> <tr> <td data-bbox="339 204 568 279">                     情報がより古い 重要度がより低い                 </td><td data-bbox="568 204 816 279">                     情報がより新しい 重要度がより高い                 </td></tr> </table>	I was born	in 1960	情報がより古い 重要度がより低い	情報がより新しい 重要度がより高い
I was born	in 1960				
情報がより古い 重要度がより低い	情報がより新しい 重要度がより高い				
	<table> <tr> <td data-bbox="339 292 479 319">情報がより新しい</td><td data-bbox="479 292 619 319">情報がより古い</td></tr> <tr> <td data-bbox="339 319 479 351">重要度がより高い</td><td data-bbox="479 319 619 351">重要度がより低い</td></tr> </table>	情報がより新しい	情報がより古い	重要度がより高い	重要度がより低い
情報がより新しい	情報がより古い				
重要度がより高い	重要度がより低い				

(久野 (1978: 17-19))

すなわち、(4B) の主題的副詞としての in 1960 は still a small boy に比して情報がより古いので省略が可能であり、(5B) の焦点的副詞としての in 1960 は born よりも情報が新しいので省略が不可である、とされる。ここまででは異論の余地はなさそうに思えるが、次のような例を観察されたい。

(6) A: In 1960, were you still a small boy?

B: Yes,  $\phi$  I was still a small boy.

(7) A: Was your son born in 1960?

B: \*Yes, he was born  $\phi$ .

(6A) の主題的副詞は状況設定のために提出された、予期せぬ、ないしは対比的な、新情報を表すものとしよう。久野のように、問いと答えの情報構造は対応するものとする限り、(6B) の基底にある in 1960 も新情報を表すことになるが、この項目は省略可能である。このことは、反復的な主題的副詞は、旧情報を表す場合に限らず ((4B) 参照)、新情報を表す場合でも省略を許すという特性をもつことを示している。それでは、今度は(7)を検討してみよう。(7A) の son には対照の強勢が与えられているものとしよう。ということは、(7A) には 'some child of yours was born in 1960' のような前提があるということであり、したがって in 1960 は旧情報を表すことを意味する。しかし、(7A) に対する答えにおいては (7B) に見るように、この反復的な副詞を省略することはできない。すなわち、焦点的副詞は、情報の新・旧に関わりなく、省略を阻止されることがわかる。つまり、英語においては、談話レベルで適用される重出要素の省略として、主題的副詞に作用するものは存在するが、焦点的副詞に作用するものは存在しないということで

ある。

主題的副詞の削除は、統語的手段によって単刀直入に規定することができる。この統語規則を定式化するためには、主題的副詞を焦点的副詞から区別する構造的基盤を明示し、同一性の条件を課せばよい。両副詞の構造的な違いは明らかである。

(8) 主題的副詞：[<sub>S</sub>S Adv]；[<sub>S</sub>Adv S]

焦点的副詞：[<sub>VP</sub>V X Adv]

主題的副詞は S 内に生起する一種の文副詞であり、焦点的副詞は VP 内で V と共起する付加詞である。このような構造的差違が得られれば、主題的副詞の削除は純粹に統語的に定式化することができる。つまるところ、主題的副詞の削除に関する限り、情報の重要度の概念、およびそれに言及する省略順序の制約(1)は、何らの動機づけももたないと言わなければならない。

### 2.1.2 動詞句削除が関わる場合

今度は、動詞句削除が関わる次の例を観察してみたい。

(9) a. John was robbed in Paris, but he wasn't  $\phi$  in London.

b. \*John was born in 1960, and Bill was  $\phi$  in 1961.

久野の枠組みによる説明は次のようなものとなる。まず (9a) については、基底構造において反復的な動詞句の robbed は wasn't よりも相対的に旧情報を表しているので(1)の制約を満たし適格文となる。一方、(9b) については、反復的な動詞の born は was と同様に旧情報を表しており、制約は満たしているはずであるが、結果は非文である。そこで久野は、「助動詞を残す動詞句省略は、省略されるべき動詞句が、節の終わりに現われている時のみ可能である」(久野(1978: 30))として統語的な歯止めを設けている。しかし、これは徹底しない説明である。(9a) では、in London は主題的副詞であるから削除されたのは VP 全体であると判定される。他方、(9b) では、in 1961 は焦点的副詞であり、動詞のみを省略した結果非文が生じたと言える。このことは、英語においては同一性の条件に従った動詞句削除なる統語的操

作の存在を認めるだけで十分である。情報の新旧は一切関与しないと結論づけてさしつかえない。

さらに、英語には、省略順序の制約に違反するにもかかわらず動詞句削除が適用されなければならない場合がある。次のような例がそれである。

(10) A: Can you go there on foot?

B: Yes, I can  $\phi$ .

(10B) の基底の情報構造の概略は次のとおりである。

(11) Yes, I can [go there on foot]. (久野 (1978: 40))  
           旧    新                  旧    新

この構造に動詞句削除が適用されたとすると、旧情報の I を残して新情報の on foot が省略されているのであるから、明らかに省略順序の制約に違反している。にもかかわらず (10B) はむろん適格文である。そこで久野は、(10B) のような文の適格性を保証するために次のような仮説を提出している。

(12) 談話法規則違反のペナルティー：談話法規則の「意図的」違反に対しては、そのペナルティーとして、不適格性が生じるが、その「非意図的」違反に対しては、ペナルティーがない。 (久野 (1978: 39))

(10B) で旧情報の I が残るのは、英語では時制を伴った (助) 動詞は主語なしで用いることができないからであり、省略順序の制約には「非意図的」に違反しているのでペナルティがない、と説明される。「非意図的」違反が許されるというのは統語的要請がある場合ということになる。統語的要請とは、今検討中の省略について言えば、削除規則の適用後に残された構成素に対する要請である。この要請は削除される構成素 ((10B) について言えば、動詞句) に言及するのをあえて避けた結果必要になったものである。このように、情報の重要度の概念を固持し、中途半端に統語的条件の関与を認めるより、すなおい動詞句削除という統語規則を認めてしまった方が記述の簡素化

の点からも望ましいことは容易に理解されよう。

### 2.1.3 動詞句内の構成素の削除に関わる場合

久野は、すでに見た「省略順序の制約」および「談話法規則違反のペナルティ」は英語のみならず日本語にも適用されると唱えている。そこで本節では、日本語において動詞句内の構成素が削除される場合を検討しておく。次の例を見られたい。

- (13) A: 昨日神田まで歩いて行ったんですか。  
       B<sub>1</sub>: はい、歩いて行ったんです。  
       B<sub>2</sub>: \*はい、行ったんです。
- (14) A: 神田まで歩いて行けるんですか。  
       B<sub>1</sub>: はい、歩いて行けるんです。  
       B<sub>2</sub>: はい、行けるんです。

(13A)では「歩いて」のみが新情報であり、残りは旧情報である。したがって、「歩いて」を残す(13B<sub>1</sub>)のような省略は許されるが、それを省略して他の要素を残す(13B<sub>2</sub>)のような文は非文となる。これは「省略順序の制約」が予測するとおりである。(14A)においては、「歩いて」と「(れ)る」が新情報であり、残りは全て旧情報である。したがって、これらの新情報の項目を残す省略は(14B<sub>1</sub>)のように何ら問題はない。ところが、新情報の「歩いて」を省略して旧情報の「行け」を残す(14B<sub>2</sub>)は非文となるはずである。しかし事実上適格文が生ずる。これを可能にするのが「談話法規則違反のペナルティ」である。日本語では助動詞は自立語ではないので、助動詞の残留は動詞の支えを必要とする。したがってこの省略に関する規則違反は黙認されるのである。

さて、久野の枠組みでは、上の例(13)、(14)に関与する省略には情報の新・旧の構造が決定的な役割を果たすとするが、少なくとも前提・焦点といった(情報構造と何らかの関わりをもつ)意味構造が関与していることは確かである。前提・焦点は疑問の焦点や、否定・数量詞の作用域の決定などなどのみち必要な意味カテゴリーである。問題の省略は、意味的条件は介在するが、基本的に統語規則として位置づけることが可能である。それはインフ

フォーマルな形で提示すれば、概略次のようなものとなろう。

(15) 次のような構造が与えられた時、A を削除せよ：

X A Y V Z

条件：i) A は先行文と同一要素であること

ii) A は焦点でないこと（任意）

iii) Z は V を含まないこと

上の削除規則を基本的に統語規則とみなすのは、この規則に課された意味条件 ii) は、実は任意であることにもよる。久野は(13A)の答えとして、(13B<sub>2</sub>)と並行的な次の形が適格文であることを見落している。

(16) はい、行きました。

(16) では、この文の焦点である「歩いて」も含めて削除が行われている。むしろ「歩いて」は残すことも可能であるから、(15)の意味条件は任意である。(13B<sub>2</sub>)のような文が非文となるのは「のだ」構文の要請を満たさないからであろうと思われる。「のだ」構文は強い主張を表す形式であるから、焦点を削除し、前提（の一部）のみを残す形とは相容れないことは当然である。

## 2.2 内在的問題

久野の情報の重要度の概念が抱える内在的問題を明らかにするために、吟味しておかなければならない点が二つある。その一つは、情報の新・旧は相対的なカテゴリーとすべきか、それとも絶対的なカテゴリーとすべきか、である。もう一つは、情報の重要度は二値的でよいかどうか、の問題である。これらの問題は、久野の概念の妥当性を決定するのにきわめて重要である。

まず、第一の問題から検討してゆこう。久野の考えでは、情報の新・旧は相対的なカテゴリーとして規定されている。そのことは、すでに(4)～(5)に見たように、「より新しい情報」対「より古い情報」、ないしは「より重要な情報」対「より重要度の低い情報」のように対立させられていることから明らかである。このような規定の仕方は多くの場合については一応は適格なもの



と言えるかもしれない。なぜなら、発話の多くは旧情報と新情報が適度に入り混っているからである。しかし、それでは、次の発話のように新情報のみからなる場合はどうであろうか。

(17) A: What happened?

B: John gave Mary a necklace.

(17B) が新情報を表す、と言う時、それは相対的なカテゴリーである「より新しい情報」を意味しているのではないことは明白であろう。(17B) は情報の新旧を計る絶対的な尺度に照らし合わせて「新」なのであって、ここに相対的なカテゴリーが介在する余地は全くない。このように、情報の新・旧を相対的なカテゴリーであるとする、新情報のみからなる発話に対して、情報をいづれかにカテゴリー化することが原理的に不可能になってしまう。これは見過ごすことのできない理論的不備である。

次に、久野の概念化の第二の問題に目を移そう。久野の設定する情報の重要度のスケールは、「より新しい（ないしは重要な）情報」／「より古い（ないしは重要度の低い）情報」のように二値的である。しかし、本当に二値的でよいであろうか。試みに、次の発話の情報構造と文アクセントとの対応を観察してみよう。ただし、(18B<sub>1</sub>) は普通の答え、(18B<sub>2</sub>) は強調を伴う答えであるとする。

(18) A: How shall I go there?

B<sub>1</sub>: You can go there on foot.  
旧 新 旧 新

B<sub>2</sub>: You cãn go there on ffoot.  
旧 新 旧 新

それぞれ新情報を表す項目の can と on foot のうち、on foot はともに焦点であり、文アクセントを帯びている。ところが (18B<sub>1</sub>) の can は新情報を表すが文アクセントは与えられておらず、(18B<sub>2</sub>) の cãn は強調を伴った新情報を表しており文アクセントが付与されている。このように、新情報は強調的か否かでさらに細かく分けられなければならない。強調を伴う場合のみな

(19) John was born in 1960, and Bill was born in 1961.  
新 旧 新

ここでは、久野の情報の重要度の概念によってかわるべきものとして、情報価の概念を提案してみたい。情報価は情報の絶対的な重要度を計る尺度として、1, 2, 3 の目盛をもつものとしよう。但し、数字が大きいほど情報価は高いものとする。それぞれの値は、独立に規定された主題・題述に固有のものである。主題は無標か有標かでそれぞれ 1 か 2 の値をとる。同様に、題述も無標か有標かで 2 か 3 の値をとる。有標の主題とは、新出主題、既出だが表現性の高い (expressive な) 主題、節からなる主題、のような「重い」主題を指す。また、有標の題述とは、題述の中心部、すなわち焦点を指す。これには否定や数量詞の作用域、疑問の焦点 (疑問詞を含む)、強調や対照を帯びた項目などが含まれる。さらに、主題・題述の区別にかかわらず、(感情的 (affective) でない、いわば無色の) 旧情報を表す項目や文脈から予測可能な項目には情報価の最低値 1 が与えられる。以上をまとめて示せば次の

ようになる。<sup>1)</sup>

(20) 情報価のスケール

- 1: 無標の主題; 「旧情報」の項目
- 2: 有標の主題 (= 「重い」主題); 無標の題述
- 3: 有標の題述 (= 焦点)

このスケールがどのように適用されるのかを以下具体例を通して観察しておく。このスケールを当てはめるに際しては、あらかじめ主題・題述が規定されていることが必要であるが、ここではこの問題にたち入る余裕はないので、河野 (1992) に従って、主題・題述はすでに与えられたものとする。以下、主題は斜体字で示す。また、情報単位である音韻句の境界もすでに与えられたものとして斜線で表示する (河野 (1979, 1987), Selkirk (1984) を参照)。任意の境界は括弧でくくって示す。

- (21) A<sub>1</sub>: What did *John* give Mary?  
                   3     2     1     2     2

- A<sub>2</sub>: What did *John* give Mary?  
                   3     1     1     1     1

- B: *He* gave her a necklace.  
       1     1     1             3

- (22) Can you believe it? *John* gave Mary a necklace.  
                                   2 (/) 2     2             2

- (23) *What John hit* was the dog.  
       2     1     2 / 2             3

- (24) a. *It* was John *who hit the dog*.  
           1 2     3 / 1 2             2

- b. *It* was John *who hit the dog*.  
       1 2     3     1 1             1

- (25) a. *In 1960*, were you still a small boy?  
           2 / 2     1 3             3 3

- b. Were you still a small boy *in 1960*?  
           2     1 3             3 3 / 2

c. Were *you* born in 1960?  
           2      1      2          3

(26) a. (*As for*) *Max*, *he* was hit by Bill.  
                           2 / 1      2      2          2

b. (*As for*) *Max*, *Bill* hit him.  
                           2 / 1      2      1

(27) *Across the street* is a grocery.  
                           2 (/) 2          3

(28) Felix is an obnoxious guy. Even Matilda can't stand *him*.  
   3          3          1      1      1

(21A<sub>1</sub>) では、無標の主題の John に情報価の 1 が、題述の did ... give Mary にはそれぞれ 2 が、焦点の What には 3 が与えられている。この種の wh- 疑問文は 'John gave Mary x' という前提の題述部分に何がしかの重要性をおいた形であり、前提（の題述）部分を旧情報として扱う（21A<sub>2</sub>）と好対照をなす。前者は、Bolinger（1986）の枠組みでは、情報の焦点と共に（残余の）題述部分にも 'Accent of Interest' が伴う場合となろう。（21B）では、主題の He、旧情報の gave her には 1 が、a necklace は問いの焦点に呼応して 3 が与えられている。

(22) の二番目の文は新情報のみからなる文であるが、John は「重い」主題であるので 2 が、題述には同じく 2 が与えられている。<sup>2)</sup>

(23) は wh- 分裂文である。主語節は有標の主題を構成しているので、旧情報の John を除いて情報価は 2 が割り振られ、独自の音韻句を築く。題述のうち叙述名詞句は wh- の値を指定する機能をもつ (Declerck (1984) を参照) ので 3 が、残りは 2 が付与される。

(24a), (24b) のような it 分裂文においては、主語の It と that/wh- 節は照応関係をもつ主題であると考えられる。That/wh- 節の内容が聞き手にとってどの程度情報的な価値をもつと判断されるかによって (24a) と (24b) の違いが生ずる。問題の節が内容豊かな主題と捉えられれば (24a) のように (旧情報を表す who を除いて) 2 が配分され、無色な旧情報の主題と捉えられれば (24b) のように 1 が配分される。ついでに、「重い」主題の場合だけが独立した情報単位を築くことに注意しておこう。

(25a) および (25b) は、状況設定の役割を担う in 1960 を有標の主題、

you を無標の主題とする多重主題構造を成す文である（河野（1992）を参照）。有標の主題は文中の位置にかかわらず 2 が与えられており、独立の音韻句を構成している。Still a small boy は両文における焦点であるので 3 が平等に割り振られている。(25 c) の in 1960 は、(25 a), (25 b) とは対照的に焦点的副詞であるので情報価は 3 となっている。

(26 a), (26 b) は左方転位を伴う文であり、多重主題構造を成す。左方転位された項目が有標の主題として 2 をとり、単独の情報単位になるほかは通常どおりである。

(27) は提示機能をもつ文である。場所を表す副詞が前置されるとともに主題化され、これと引きかえに主語の a grocery が題述化されている。この場合の主題・題述はともに有標である。

(28) の二番目の文は、通常の情報構造を破り、主題と題述の位置が反転しており、him が主題、残りの部分が題述となっている。Can't stand は先行文から予測可能な内容であるから情報価は 1 である。逆に Even Matilda は強意を帯びており 3 である。

ここで、「旧情報」の項目として包括的に扱ってきたもののうち、文脈から予測可能な項目の情報価について触れておきたい。まず次の文の名詞句に注目しよう。

(29) a. *There are various problems to computerize.*

1 2 3 3 3

b. *There are various problems to solve.*

1 2 3 3 1

叙述名詞句は存在文の焦点として情報価 3 が与えられることを予測させるが、(29 b) の名詞句補部の to solve は情報価が低い。これは名詞句補部の意味内容が主要名詞から予測可能、ないしは推論可能だからである。(29 b) の to solve は削除してしまっても不都合は生じないが、(29 a) の to computerize は十分な情報量を保持しており、削除は不可である。次に、同種の項目を動詞句に求めてみよう。

(30) A: What are you using my pen for?

B<sub>1</sub>: Because it writes beautifully.  
                                   1      3          3

B<sub>2</sub>: Because it writes well.  
                                   1      3      1

Gussenhoven (1983: 38) によれば, (30 B<sub>2</sub>) のような Adverb of ‘proper functioning’ は (30 B<sub>1</sub>) のような一般の副詞と異なり, 文アクセントをもたないという。文アクセントは情報価の反映であるから, 当面の議論のためには (30 B<sub>2</sub>) の well のような副詞は情報価が低くなることに注意しておけばよい。ある動作・作用にとって ‘proper functioning’ は無標の様態であるとみなすことは不自然ではないと思われるから, Adverb of ‘proper functioning’ は先行する主要動詞から予測可能となるものと解される。最後に, 文レベルにおける情報価の降格現象を観察しよう。

(31) *John protested.*  
                                   2          2

(32) a. *The telephone’s ringing.*  
                                   2          1

b. *The dog’s escaped.*  
                                   2          1

c. *The brakes failed.*  
                                   2          1

上の (31), (32) はすべて ‘news’ sentence であるが, このような文の一般的な情報価の配置は (31) の形をとる。(32) に見るように, 動詞の内在的特性および動詞と主語との相互作用の結果, 動詞の情報価が降格される場合がある。この種の動詞は, Allerton and Cruttenden (1979) によって ‘empty’ verb, verb of (dis)appearance, verb denoting a misfortune と特徴づけられているものである。これらの動詞は多かれ少なかれ, 意味的負荷量が少ないか, 主語から予測される可能性が高いか, のいずれかの特徴をもつ。

### 3.2 情報価と文アクセント

情報価は文 (または句) レベルのアクセントの形成に深く関与するが, 以下では, 音韻句 (すなわち情報単位) 内の最大のアクセントである核強勢に

限定して情報価との関連を明らかにしておきたい。

3.1節で取り上げた例を通じて、情報価と核強勢との対応は直線的である。Wh- 疑問文の(21A<sub>1</sub>)を除いて、(21)～(32)のすべてについて、それぞれの音韻句内の情報価の最大な項目が、そしてそのような項目が複数存在する場合には一番最後の項目が核強勢を帯びると言える。<sup>3)</sup> これは極めて一般的な事実である。この事実の唯一の例外となっている(21A<sub>1</sub>)においては、核強勢は情報価が最大である What ではなく、情報価がその次に高い Mary に置かれている。この場合、What の情報価は 3、Mary の情報価は 2 であることに注意しよう。同じ wh- 疑問文であっても、(21A<sub>2</sub>)においては、核強勢の位置は情報価 3 の What から情報価 1 の Mary に移動することはない。このように核強勢の獲得権が譲渡されるのは、先行する情報価 3 の項目と後続する情報価 2 の項目の間に限定されると言える。このことは、絶対的な情報価が一定のレベル以上になると、情報価の相対的な序列よりも、可能な限り音韻句の後方に音調の中心を置くという原則の方が支配的になるという事実を示している。結局、情報価にじかにアクセスする核強勢規則は次のようなものとなろう。

### (33) 核強勢規則

$[1 \text{ stress}] \rightarrow [1 \text{ stress}] // X[P \text{ \_\_\_\_\_\_ } Q]_{A^m} Y //$

但し、/ は音韻句の境界を、A は語を、m は情報価を表すものとする。

条件：i)  $Q \neq \dots [1 \text{ stress}] \dots$

ii)  $m \geq 2$

iii)  $Y \neq \dots B^m \dots$

## 4. 結 論

本論の前半部では、久野の提案する情報の重要度の概念の妥当性について検討した。その結果、次の二点が問題点として浮彫になった。第一は、久野の概念は省略現象を記述するのに有用な手段とはなりえないことである。第二に、情報の新・旧のカテゴリーは、久野の考えるように、相対的・二値的なものとはみなせないことである。そこで本論の後半部では、久野の概念の難点を克服すべく、情報価という概念を新たに導入した。情報価は、主題・

題述といった発話の基本的な情報構造に言及して情報の重要度を数値化するものであった。主題・題述についてそれぞれ無標か有標かの区別をすることで、客観的な情報量の差のみならず、「表現性」といった主観的な情報内容の有無も測定できるように工夫した。このように規定された情報価は文アクセントとの相関を示す。そこで、最後に、情報価に依存した核強勢規則を定式化した。この規則は、情報価の規定の仕方のおかげで、従来の核強勢規則よりも記述力が増している。この規則は、例えば Selkirk (1984) の枠組みで言えば、Nuclear Stress Rule と Pitch Accent Prominence Rule を合わせたものに匹敵する。この核強勢規則は、少なくとも、Bolinger (1986) の言う 'Accent of Interest' を捉えたものと言えよう。

## 注

\* 本論文で展開する「情報価」の概念は、日本英語学会第9回大会（1991年11月）のシンポジウムで「多重主題構造と強勢型」と題して口頭発表した論文の中で提出したものに大幅な改訂を施したものである。

- 1) 情報価の概念は、おおむね Firbas の 'Communicative Dynamism' (=CD) に対応するものと思われるが、両者は重要な点で異なる。それは、CD は究極的に Theme, Rheme およびその中間段階の Transition を決定するための尺度であるのに対して、情報価は独立に規定された（有標／無標の）主題・題述に付与される情報上の度合である。両者は異なった結果を予測する。例えば、CD によれば、主題は CD の尺度の最下位のものであると規定されるが、情報価の概念では、無標の主題と有標の主題とでは異なった情報価が与えられる。また、CD では、CD の度合が主題と同等か、ないしは主題より低い題述の存在は定義上排除されているが、情報価の概念では許される。
- 2) 前提および焦点を、実質的にそれぞれ旧情報および新情報に対応するものとする立場（例えば Jackendoff (1972)）では、(22) のような文は焦点のみから成る文ということになる。しかし、本論では、焦点は有標の題述として、より狭く限定して用いている。(22) のような文の題述をとくに有標とすべき理由はないので、情報価は3ではなく2を与えておく。
- 3) 核強勢を適切に付与するためには、適格な音韻句が得られていることが必要である。すでに2.2節で検討した (18) や (19) のように、強調や対照を伴う項目とそうでない項目とのアクセントの違いも、音韻句の構成の違いに求



められるべきであると思われる。例えば, (18B<sub>1</sub>) と (18B<sub>2</sub>) は次のように分析できる。

(18' A:   How shall I go there?

B<sub>1</sub>:   You can go there on fōot.

1   2   1   1       3

B<sub>2</sub>:   You cān go there on fōot.

1   3 / 1   1       3

(18' B<sub>1</sub>) は全体で一つの音韻句を成し, foot が核強勢を担う。一方, (18' B<sub>2</sub>) は二つの音韻句から成り, 前半は can が, 後半は foot が核強勢を帯びる。(18' B<sub>2</sub>) のような音韻句の構成を保証するためには, 一つの音韻句には最大一個の (ここで用いている意味での) 焦点しか許さないように制限を加える必要がある。もちろん, 同一焦点内の項目は, (25 a), (25 b), (28), (29 a), (29 b), (30 B<sub>1</sub>) のように同一の音韻句内に共起できる。

### 参考文献

- Allerton, D. J. and A. Cruttenden. (1979) "Three Reasons for Accenting a Definite Subject," *JL* 15, 49-53.
- Bolinger, D. (1972) "Accent Is Predictable (if You're a Mind-reader)," *Lg.* 48, 633-44.
- . (1977) *Meaning and Form*, Longman, London.
- . (1986) *Intonation and Its Parts*, Stanford University Press, Stanford.
- Chomsky, N. (1970) "Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation," in Jakobson, R. and S. Kawamoto (eds.). *Studies in General and Oriental Linguistics*, TEC Corporation, Tokyo, 52-91.
- Daneš, F. (1967) "Order of Elements and Sentence Stress," in *To Honour Roman Jakobson; Essays on the Occasion of His Seventieth Birthday*, Mouton, the Hague, 499-512.
- . (1974) "Functional Sentence Perspective and the Organization of the Text," in Daneš, F. (ed.). *Papers on Functional Sentence Perspective*, Mouton, the Hague, 106-27.
- Declerck, R. (1984) "The Pragmatics of *It*-clefts and *WH*-clefts," *Lingua* 64, 251-89.
- Firbas, J. (1972) "On the Interplay of Functional Sentence Perspective," in Fried, V. (ed.). *The Prague School of Linguistics and Language Teaching*, Oxford University Press, London, 77-94.
- . (1974) "Some Aspects of the Czechoslovak Approach to Problems of Functional Sentence Perspective," in Daneš, F. (ed.), 11-37.

- 福地肇 (1985) 『談話の構造』 大修館, 東京。
- Gundel, J. (1977) "Role of Topic and Comment in Linguistic Theory," reproduced by Indiana University Linguistics Club.
- Gussenhoven, C. (1983) *On the Grammar and Semantics of Sentence Accents*, Foris Publications, Dordrecht.
- Halliday, M. A. K. (1967/68) "Notes on Transitivity and Theme in English," *JL* 3, 37-81, 199-244; 4, 179-215,
- . (1985) *An Introduction to Functional Grammar*, Edward Arnold, London.
- Jackendoff, R. S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Keenan, E. O. and B. Schieffelin. (1976) "Foregrounding Referents: a Reconsideration of Left Dislocation in Discourse," *BLS* 2, 240-57.
- Kohno, T. (1979) "Principles for Determining the English Phonological Phrase," in Bedell, G., E. Kobayashi, and M. Muraki (eds.). *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*, Kenkyusha, Tokyo, 251-67.
- 河野武 (1987) 「英語イントネーションの談話機能について」, 『大妻女子大学文学部紀要』 第 19 号, 51-62。
- . (1988) 「多重主題構造について」, 『大妻レビュー』 第 21 号, 57-69。
- . (1989) 「談話における焦点主語について」, 『大妻女子大学文学部紀要』 第 21 号, 31-41。
- . (1990) 「談話における時間と場所の図式について」, 『大妻レビュー』 第 23 号, 27-38。
- . (1992) 「多重主題構造論 (再考)」, 『大妻レビュー』 第 25 号, 63-76。
- Kuno, S. (1972) *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』 大修館, 東京。
- Prince, E. F. (1978) "A Comparison of WH-clefts and *It*-clefts in Discourse," *Lg*. 54, 883-906.
- Reinhart, T. (1982) "Pragmatics and Linguistics: an Analysis of Sentence Topics," reproduced by Indiana Linguistics Club.
- Rodman, R. (1974) "On Left Dislocation," *PIL* 7, 437-66.
- Selkirk, E. O. (1984) *Phonology and Syntax: the Relation between Sound and Structure*, MIT Press, Cambridge, Mass.

